

【唐衣】からころも その2

枕詞としての唐衣の意味を探ってみましょう。

その手掛かりをルネサンスの巨匠ミケランジェロの作品に見いだそうと思うのですが話が飛躍しすぎるでしょうか。

ミケランジェロにとって聖母マリアは生涯のテーマでありその核心である母性の表現に衣の表現は重要です。

マリアの身にまとう衣は大地を覆うかのように幅広く、彫り深く描かれています（ドーナ家の聖家族）。

またキリストを膝に抱く姿にも、衣で暖かくキリストを包み込み癒すかのように、大きく深く彫られ（ピエタ・サンピエトロ大聖堂）、ときには幼いキリストを外敵から守るように衣に包み込んでいます（階段の聖母）（タッディの聖母）。

マリアの衣に包まれたキリストは幼児像であれピエタ（十字架から降ろされマリアに抱かれたイエス像）であれ、母性愛に包まれキリストの苦悩を癒すかのように見うけられます。

こうした作品のマリアの衣の表現は母性の象徴として扱われ、女性美を母性に求めるミケランジェロの内面的事情による結果と思われる。

衣を女性の象徴として捉えた例は日本でもみられます。

- ・多摩川にさらす手作りさらさらになにそこのこのここだかなしき  
〔多摩川にさらす布をさらさらと川にさらすように、さらにあの子が愛しいよ〕
- ・筑波嶺に雪かもふらるいなほかも愛しきころが布ほさるかも  
〔筑波山に雪が降っているのだろうか。いや、愛しいあの子が布を乾しているのかなあ〕

これら『万葉集』東歌は布が愛しい女性を連想させる契機となっています。

織りも染めも縫いも、昔は衣に関する仕事は女性の役割であったことから理解できます。

さらに、白さ、やわらかさ、肌ざわりのよさ、身にまとう暖かさなど衣・布の持つ特性が女性のやさしいイメージと結びつきやすいことにも要因があるのでしょう。

このように衣・布は東西を問わず女性を象徴するものだったのです。

再び、『伊勢物語』にもどりましょう。

- ・唐衣きつつなれにしつましあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ

この歌は折句がみごとに決まっていますし、「唐衣」＝「着る」の枕詞、＝「なれ」の序詞。「馴れ＝褻（肌に接する下着）」「棲＝妻」「来＝着」などの掛詞が仕掛けられていることは多くの古典読本の説くところでは。

「唐」はいわば「衣」に対する接頭語の役割を果たしているようです。そして、「衣」は女性（妻）を象徴しているのです。

「唐衣のように着慣れた棲（妻）」という表現は先の東歌と同様に、衣から女性への連想が見られ

ます。

心細い旅路のさなか、遠方に残してきた妻を思い出すとき、妻を暖かく柔らかい衣のようなイメージとして捉えたと解釈するとき、作者の寂しさがより伝わってくるように思います。この歌の「唐衣」は妻そのものといえましょう。

唐衣は茶の湯の世界では『伊勢物語』の歌から、杜若を模った初夏の菓子銘などに使われているようです。さわやかな初夏の香りと、王朝の雅が味わえますね。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~